

## ダニ場山のワラビ群落の復活 (2020 05 14)

9割を覆っていたタケニグサが消えた日

ダニ場山は、京都西山連山の中腹(300m)にあって、樹木が生えられない草ぼうぼうの急斜面のガレ場の山である。ワラビやウドなどの山菜を恵んでくださる有難い山で、3月から4月にかけて、もう40年近くもこの山に通って恵みを受けてきた。山主のMさんは大らかな方で、『自然に生えるものだから誰が採ってもいいよ』と許して下さったいきさつもあって、多い年にはワラビ30キロ、ウド数キロもいただいてきた。

ところで誰が名付けたか知らないがダニ場山には実際にマダニが多いようで、隙のない服装と防虫スプレーなどの対策は欠かせない。マダニを連れてくるのは、イノシシやシカ・ノウサギなどの草食獣で、夜間に採食にやって来るらしく、あちこちに糞が見られるのと、冬の間にはイノシシがワラビ根やウドの根を掘り起こして食べるので、ガレ場の草原として維持されている。赤土に砂礫が多く混じるもろい地層で、風が吹いても雨が降っても表土の崩壊が進み、樹木は根を下せないらしい。



山菜採りの季節が過ぎた五月半ばにやってきたのは、この山に通い始めて以来初めてのことで、山菜にはいっさい手を出さずにじっくりと植生と周りの自然を観察するのが目的でやってきた。

ダニ場山には植生の異変が起きていて、去年(2019)の春には、全面積の9割がたをタケニグサが占領していた。上の右側の写真にはタケニグサの枯れた地上部がまばらに写っているが、去年の春は竹に似た2~3メートルの枯れた茎が密生し、通行を妨げるほどに繁茂していたのである。今年(2020)の春は100%タケニグサの群落に変わっているだろうと思っていたのであるが、予想に反してタケニグサは衰退し、ワラビが全面に繁茂していた。この逆転現象は一昨年(2018)の夏に起こったものらしく、①タケニグサの自家中毒 ②タケニグサにウイルス性などの病変が起こった、などが考えられるが下の写真が参考になるだろう。



ワラビの中に生えていた左の株には病変がみられ、森に逃げ込んだ右の株は正常である。



タケニグサは数種類のアルカロイドを含み、ワラビはその毒性により衰退したのか、あるいはタケニグサの厚い広い葉が地上2~3mを覆い、陽光を奪ったために衰えたのか解からずにいたが、これほどに回復したワラビの大群落を見ると、陽光説のほうに理があるように思う。



この1ヘクタール以上ある広大な斜面は、かつてはワラビを主としたススキなどのイネ科植物を含む大きな草地であったが、シカやイノシシ・ノウサギなどの草食獣に喰われ、そのうえ踏み荒らしにも遭って崩壊が進んでいたところに、タケニグサが侵入してきて数年でほぼ全面を制圧したのであった。丈の高いタケニグサは下草から陽を奪って駆逐しただけではなく、その毒性ゆえに草食獣も来なくなり、急傾斜の崩壊も一時的には中断している。

上の写真は2017年春に撮影したものであるが、まだ下草にはワラビの枯れ草が見える。タケニグサはおそらく2018年をピークにして2019年には劣勢に転じたものと思われる。

地面に太陽が戻ってくると、地中で耐えていたワラビは一気に息を吹き返し、前にもましての大群落となった。この夏には陽光を独占して繁茂し、ワラビ根に栄養を蓄えることだろう。ほかの植物も戻ってくるだろうし、この冬にはイノシシが再び太くてお美味しいワラビ根を掘り返し、来年の春には草食獣が食べられる草も生えて、ワラビ採りと草食獣の天国が戻ってくることだろう。かくしてダニ場山のワラビは大群落となって復活するのだろう。





草地の斜面の中ほどに生えたニワトコの樹ノ下の日陰に腰を据えて、おにぎりを食べたりコーヒーを飲みながら、先ほどから3時間も瞑想にふけっている。オオルリだろうか、背中の子小鳥が2羽連れだって目の下を飛んだ。キビタキも同じところで囀っている。すぐ近くのジャケツイバラの黄色い花には、クマバチが数匹頻りにやってきて吸蜜しているようだが、ときどき間違えて私の黄色いスパッツめがけて飛んでくる。コロナ禍の下界を見下ろしながらの贅沢なひと時であった。

なんて虫 ??? 茶の葉のようだが、こんな急斜面にも茶を栽培していたのだろうか。FBでは、宮武先生から『種名は分からないけど、ベッコウガガンボの仲間ですね。』的場さんからは、写真を添えて『ベッコウガガンボですね。触覚から判断し左が♀、右が♂です。』と、ご教示いただいた。





ジャケツイバラの棘は釣り針のように曲がっている。オーストラリアのジャングルにも似た茨があって、原住民は「チョットマター」と呼ぶそうだ。バードガイドのアンディーは、日本通で物知りだった。



私は今、ジャケツイバラの動向に注目している。2000年以降にダニ場山に侵入してきたのであるが、10か所ほどに増えた。荒れ地に強い植物であり今後も増え続けることだろう。ジャケツイバラの逆さ棘は細い蔓の先までついていて、知らぬ間に衣服に絡みついて『ちょっと待てー』と絡みつくのである。棘は釣り針のように鋭く曲がっているので、はずすのに一苦労することになる。

こんな意地悪で凶暴な植物は、繁茂してもらいたくはないのであるが、どうしようもないか。